
改変世界がネットゲで

否憑 零華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改変世界がネットゲで

【Nコード】

N2187BA

【作者名】

否憑 零華

【あらすじ】

俺達の世界にネットゲが上書きされた！？元の世界に戻す？んなもんするか！ネットゲだったらクリアするしかないだろ！まずはレベル上げだ！…なん…だと？ステータスがバグっている…

処女作です、よろしくお願いします。

第零話 プロローグ前（前書き）

処女作です、よろしくお願ひします。

第零話 プロローグ前

空が紅く染まる世界で僕は沢山の人と出会った。

真っ赤な眼をした殺人鬼

「最低だよ、人類の中で最もな」

真っ青な瞳の科学者

「君は終わらせたいの？それとも、終わらせたくないの？」

不死で不滅の司書

「お前は結局何をしたかったんだ？」

そして、唯一無二の魔法使い

魔法使いは、相棒は僕に問う。

「あなたの、お名前は？」

僕は…

プロローグ

「Devise on」

俺の声に反応し、デバイスが起動する。

さっそくメールを確認し、返信しておく。

それから、ここらのエンカウント率も調べておく。

「はあ、今日は結構高いな」

エンカウント率とは、モンスターとあう確立のことで、

この確立が高いとモンスターに出会いやすくなる。

目線をデバイスから道の先に向けると…

「げっ」

モンスターがいた。それも大量に。

一ついっておくと俺は一般人だ。残念ながら。なんの特殊能力も戦闘能力の無いと自覚している。

だからモンスターと出会った時は…

「ふ」

見敵必殺？違うな、見敵逃走だ。俺は逃げ足だけは異常なまでに速い。

生きていく上で必要なスキルだ。自然と身につく。

走ること約十分。ようやくモンスターの姿がなくなった。

モンスターの大量から逃げて角をまがったら、そこでまたモンスターが現れるという悪循環。

久しぶりにガチで走った。そのせいで、現在絶賛迷子中

そもそもモンスターなんかいるのが悪いんだ。まったく、実際に自分が体験すると

面倒このうえない。『ソア』には悪いことしたな。いや、今は俺が

『ソア』な訳

なのだが。ああ、思い出す。あの部屋で行なっていた命の駆け引き、手に汗握る

緊張感、知略を尽くすバトル、勝利の愉悦と達成感。…まあ、ネットゲナ訳だが。
い、いや！？違うぞ諸君！！前の俺がネットゲ廃人であったり、課金で我が家の
生活金を食いつぶしてなんか無…（。°。°）ハッ！
ま、まあ、そんなことは置いておいて、早くわかる所まで出ないと、さっきみたいにモンスターと会っちまう…

十分後

「ふっざけるなああああああ！！！！」
ドドドドドドッ

「こつちくんなああああああ！！！！」
絶賛追われ中

悪循環はまだ終つてはいなかった！
「誰か助けてええええええええええ！！！！」
もー神様でも誰でもいいからお助けええええ！！
『ライトニングブレイカー』

世界が、白に、染まった。

S i d e o u t

S i d e o r d e r

白い閃光が放たれた跡には夥しい数のモンスターも亡骸と呆然と
している一人の少年。

閃光の主は遙か高みからそれらを眺めていた。

（…なんで逃げ回っていたんだ？まあ、これほど数がいっきに出た

のなら分かるが、

数体なら楽に倒せる雑魚モンスターだろう。）

彼はそれらから興味を無くしたらしく、どこかへ去ろうとした時、ぞわっ

（なんだ！？この違和感、いや嫌悪感は）

嫌悪感がする方を見るとさっきの少年が危なげな眼をして立っていた。

その瞳は

紅くそまっていた。

（！！！！なんだあの目は？『分析』^{アナリクス}）

分析魔法は対象の状態や大まかなステータスが分かる。

彼が使った魔法ではステータスのランク、称号を見ることができ、そして彼は今度こそ心の底から驚愕した。

（Unknown！？ステータスが見えない！！隠蔽魔法の一種か！？いや、

隠蔽魔法が使えるぐらいならこの程度の雑魚共、一瞬で焼き払うだろう。

それにしてもなんだこの感覚は！？）

見たことのない状況に戸惑っている彼に、少年の眼が向けられた。眼が合った

！！！！！！！！

（ヤバイヤバイヤバイ！！！！殺される！！一瞬もなく殺される！！

だめだ、逃げなくては。でもどこへ逃げる？どうやって逃げる？無理だろう。

アレからは逃れられない。最前線でも味わったことのない威圧感。

絶対的な感覚。アレはまさに…）

死そのものだ

彼が動けない中、少年はゆっくりと、ゆっくりと

前のめりに倒れた。しかも頭から。

ごっちーん

さつきまで死ぬほどおびえていた彼でさえも思った。

（あ、痛そう……。じゃなくて！なんだ？さつき感じたあの感覚は今も感じない。では気のせいか？ならばもう一度『アナリアス分析』）

もう一度彼が調べると、少年のステータスはあのモンスター達から逃げるのも納得なものになっていた。

（見間違いか？あせていたのかもしれない。まあいい。ひとまず用はすんだから帰らせてもらおう。そのまま彼は飛び去っていった。

ここで彼は一つ大きな失敗をする。紅い眼をしてたときの少年のステータスの異常さにめが捕らわれ称号のほうには目がいつてなかったのである。紅い眼をしたときの彼の称号をみたのなら、帰らずここで始末していただろう。

紅い眼のときの彼の称号『幻想世界の殺戮者』という称号をみていれば。

Side out

Side Soa

「…あつぶねえ」

なんか上の方からすっごい光がびゅーんって来て、どかーんってなった。いや、マジでそんな感じ。やべえ、死ぬところだった。それにしても、さっきのプレイヤー、謝りもせずに行ったな。

ソレハスコシ「礼儀」ガナツテナインジャナイカ？

「まあ、いつか。あれだけの魔法が使えるんだから最前線で戦うプレイヤーなんだろ」

魔法。数年前では小説やアニメの中だけでの空想、妄想、幻想。

だが、今ではとても重要なものになっている。

魔法だけじゃない。生活から趣味まで、全人類は一変してしまった。そして、なにより変わったのは、生活に戦闘が組み込まれた事だ。安全を守る為には、モンスターを狩らねばならないし、食料も手に入れない。入れなければならぬ。

そして、元の世界に戻るにはあの塔を攻略しないといけない。

と、考えられている。

俺は元の世界に戻る必要は無いと思うがな！

この世界が、こんな幻想に包まれたのは約二年前のことだった。

第零話 プロローグ前（後書き）

処女作なのでご容赦ください、
ですが、意見などがあればビシビシ言ってください。
よろしくお願いします

プロローグ

2029年

連合国家U・S・E（Union・states・of・Empire
ror）通称皇国家が出した最優先プロジェクト「Project
Restart」皇国家皇帝「アイリアス・A・Z・アイルンハ
ルト」が考える用に世界を改変するという無謀ともいえるプロジ
ェクト。

だが、皇国家は技術、軍事力ともに優れており、その力は皇国家を
除く他国が総結集しても、余裕であしらえるほどだった。
と、同時に圧倒的な科学力で世界にその力を知らしめていった。

また、軍の練習用に作られたVRシステムは、一般家庭でも所有で
きるまで広まっており、生活からゲームまでありとあらゆる事をサ
ポートしてくれるぐらいに高性能だった。

また、VRを使えるのは2000年代にはやった家庭用ゲーム機な
どのように、

据え置き機ではなく、体につけて持ち運べるような携帯型だった。
人々はそれを「Devise」と呼ぶ。

またデバイスは改造から自作まで許されており、コアなゲーマーな
どは、自分用にカスタマイズしてつかっていた。

かくゆう主人公もネットゲが好きで自分のデバイスを改造したのだが、
改造の方にはまってしまつてネットゲを疎かにしてしまうほどだった。

彼は幼少期から親が買ってきた機械仕掛けのおもちゃを分解して新
しい物を創る事に長けていた。

その腕はネット上で「お前が神か」と言われるほどだった。

彼は自分が改造したデバイスを手で売って一儲けした。
そしてその金を使い、リアルマネートレード RMTをして最前線でも手に入りにくい極レア
武器防具を装備した。

だが、所詮は初心者。そのへたつぷりはネットゲ上で「チート装備の
ンサー初心者」という二つ名がつけられるほどだった。

たしかに俺は二つ名が欲しかったが、それは厨二的じゃなかった。いいモノ
であつてこんな情けないモノではなかった……
と、orzの格好をした彼は語った。

そんな彼にもお気に入りのゲームがあつた。世界で初めて発売され
たVRMMORPG。

「Real World Online」まさに、というような名
前に、とくに変わり映えもない普通のRPG。

剣と魔法のアクションバトル。特徴があるといえば、翼が生えて飛
べるぐらいのシンプルなRPG。

だが、現実世界を完全再現したそのクオリティ、職業の多さ、果て
しなく長いストーリー

それは全世界の人を虜にしてしまうほど魅力的だった。

残念かどうかはわからないがこのゲームには課金アイテムやRMT
が何故か

なかつたので彼は自分のレベルにあつた装備をしていた。

もちろん初期装備である。

と、思うが実は結構レアな装備を所持していたもともと戦闘がそれほど得意ではない彼は生産系の職業を手に入れた。

現実世界でも発揮したその物創りに関する才能のおかげで装備もお金も結構持っていたが、戦闘をあまりしないのでレベルはいまだ45。

一般プレイヤーが初めて一カ月でだいたい15レベル上がる事を考えると今月でちょうどプレイ一年になる彼がほとんど戦闘をしてないのがわかる。彼に戦闘は向いてなかった。

武器をつくる時、ほとんどのプレイヤーが素材を持ってきてくれるので

客の注文が来た時にぐらいいしか装備は創らない。というか創れない。生産スキルのレベルに自分のレベルが追いつけなかったのだ。

ちなみに彼は生産系のスキルはすべてレベルが上限に達していた。彼は積極的に戦闘しないが、それでも暇な時は自分で素材を採りに行く。

だがほとんどの場合、常連の客とパーティーを組んで高レベルが行く所に憑いていく

いわゆる寄生をしてレアな素材を全部もらって自分用や展示用の武器を創ったりした。

いつしか彼は、彼があこがれるような厨二的な二つ名を手に入れた。アンリミテッドメイドワークス「無双生産」それが彼の二つ名だった。これを知った時、彼は泣き崩れた。

やったよ、遂に俺やったよ、とうわ言のように繰り返す姿を見て客が数人はなれていったのは余談

そしてこれからも、彼は面白ろ可笑しくそんな生活を続けていつて、いつしかゲームに飽きる。

そんな風に彼は、彼らは人生を送った。

送るハズだった。

だが、

2020年、二月十日「Project - Restart」決行
事前の連絡もなくいきなり世界は

改変した。

彼は「Real World Online」のプレイ中だったが
急にログアウトした。

今までになかった事態に緊張したが、すぐに再接続した。だが、繋がらない。

「メンテナンス中」というアナウンスが帰ってくるだけ。

あれ？メンテナンスなんて今までであったっけ？と彼が思い起こそうとした瞬間

さらさらさら

突然体が、部屋が、端から砂みたいな光の粒になって消失していった。

彼は驚く前に、なぜか理解した。ああ、世界がリセットされるんだと。

自分は消去されるんだと、プロジェクトが始まったんだと。

体が、存在が、自我がさらさらと端から消えていった。

彼が消える直前に感じたものは、どこかでみたような紅い空と、ときどき聞いた、どこか機械質で、それでいて少しさびしげな声だった。その声は確か、こんな事をいていた。

「Welcome to the New World!」

プロローグ（後書き）

ご意見があれば、よろしくお願いします。

第一話 「説明」(前書き)

なぜだろう、変なテンションになりました。開いてくれてありがとうございます。

第一話 「説明」

Side Soa

気が付いたら俺は知らない町にいた。

あれっ、たしか俺は自分の部屋にいた筈だ。それで・・・

「っ！！」

そうだ、思い出した。たしか世界が改変されて・・・でも、そしたらなんで俺はここに？てか、ここどこだ？

「はあ・・・」

俺は溜め息をつき、つい、いつもの癖でRWOリアルワールドオンラインでのステータスを表示させる動作、右腕の指を二本立て下に振り下ろす動作をした。すると・・・

「なに・・・！？」

ステータスが表示された。RWOでのステータスとまったく同じだった。たぶん。

いや、よく覚えてないが、スキルの熟練度やレベルから見て間違いないだろう。

いや、つまりここは「RWO」の中なのか？

「いや、違うよっ」

「っ！！！」

なんかさっきから驚いてばかりな気がする。
じゃなくて！誰だ！？

後ろを振り返ってみると・・・

ふりふりのスカートを着た

オッサンがいた！

へ、変態さんだああ！！！！

「うん？どづしたんだい？」

「い、いえ。なんでもありません」

やっべええええ！気持ち悪！え？何これ？何のフラグが立ったの！？
え、そつちいつちやう系！？え、そうなの！？

「・・・ナニを考えているかは聞かないがひとまず説明させても

らおう」

「．．．またつつこんだら話が進まないな、素直に聞こう。」

「僕は別に突っ込んでもらってもいいんだがね」

「ウホッ、じゃなくて、いいから話せよ！もう話が進まねえよ！」

「乗ってきたのは君じゃないか．．．、ゴホンッ。もう説明するね。この世界は、もともと君たちがいた世界にVRMMORPGの「Real World Online」が上書きされた世界で、そのおかげでRWOのステータス「ちよ、待て！」

「転生モノと思っただか？甘いな！！異世界モノだ！！」

「．．．なんか電波が。それより…」

「マジですか？」

「マジです」

マジかよ

「てか、世界がU・S・Eのおかげで改変されたのは解るが、なんでRWOなんだ？」

「RWOプレイヤーがU・S・Eのお偉いさんにいたのか？」

「さあ、何故だろうね。それは僕にも解らないよ。てか、君、理解というか納得するの早いね」

「「うーいう超展開は、出来るだけ信じるようにしているんです」

そっちの方が面白そうだからね！

「そうか、こっちも説明が早くすんで嬉しいよ。じゃあ、説明を続けるよ。」

と、いつてもルールはだいたいRWOと同じだからそこら辺の説明はいらないね。」

ただ、覚えていてほしい。ここがいくら「Real World Online」と似ていても

ここは現実世界。君たちの現実だ」

つまり？

「お腹は減るし、トイレも行く必要がある。性欲も溜まるし、殺されれば死ぬ」

へー。

「君は反応が薄いね。てか、怖くないのかい？」

なにがだい？永沢君。

「永沢君じゃないけどね。死ぬのがだよ」

あー、まあ怖くないね

「なんでだい？今まで来た人はこれを聞くと大抵びびってしまっただが？」

うーん、あれだ。俺は死んだことがないからな。

「うん、そうだよな。当たり前だよな。」

俺自分が経験した事しか信じない人なんだよね。だから、いくら他人が「死ぬのは怖い」

とか言っても、信じれないというか、うーん。いいにくいなあ。

「・・・ふーん、君はそういう人なんだね。変ってるね」

むしろ他の人間が変わってるんだろう。だってさ、『死』を体験した事ないのに

『死』が怖い、なんて言う。なんて「戯言」まさに「傑作」だろ？

「君が西尾維新のファンだという事は分かった。いやあ、本当に君は変わってるよ。」

同じ「僕」からみてよね」

ははは、そういう言い方をするとあなたがまるで「他の人」じゃないみたいじゃないか

「うん？そうだよ？僕は君だよ」

「嘘だっ！俺がこんな変態なワケがないっ！」

「まあ、外見はランダムだからね。それに、自分を納得させる方法は自分が一番よくわかってるだろう？」

そうはかぎらないと思うが、そうかもしれないな。

てか、あなたの言う事を信じたとして「お前」が「俺」だったらわざわざそういう質問をする必要はないと思うが？

「僕はあくまで説明役だからね、余計なモノは省かれているのさ。たとえば「記憶」とかね。」

だから僕はほとんど別人だよ。ただ根本が君と同じなだけ。というか、気が付いているかい？君、ほとんど声に出して言葉をいってないよ。」

あ、本当だ。テレパシーってやつですね。

てか、お前が俺だったら、もう少しまともな外見をしてくれよ。頼むから。

精神的にツライ。

「どうしようもないね。だったら、早く話を終わらせるしかないよ。ん？まだ話は終わってないのか？だったら早く終わらせるよ。」

「わかってるよ。じゃあ、最後に質問を一つ。」

お前、この世界で生きるか？」

あ、じゃあ元の世界帰ります〜。

「お願い、シリアスな場面だからちゃんと答えて。いや、マジで」

『「シリアスプレイヤー真剣殺し」それが僕の過負荷だ』

「うん、球磨川君はわかったから、そろそろ真剣に答えよう」

分かったよ、しょうがないな。

「生きてやるよ、この世界で！」

「ああ、よかった。生きてくれないと僕が君を殺す処だったよ」

死亡フラグ直前だった！あぶねえ！

「おや、死んでも怖くないんじゃないかなかったっけ？」

生きることに執着してるんです。でも、死んでも別にいい、って感じです。

「意味分らないよ」

俺も分からなくなってきた。てか話は終わっただろ。早くどっか行けよ。

俺の精神の為に。

「ああ、そういえば僕はふりふりのスカートを着ていたね。残念なことに」

本当にお前の格好が残念だから、早く消えてくれ。

「了解。では、これからいろいろ大変な事が起きると思うが、まあがんばれよ」

そういつて彼は消えた。

．．．セリフだけは格好いいのになあ。

そう俺が思った時、目の前にワープゾーンみたいなのが出てきた。

「・・・みたいなのじゃなくて、ワープゾーンだよな、コレ」

もしかして、ここって「もう一人の自分がこの世界の事を説明するための場所」

みたいな感じの所なのか？だったらコレは最初の町に繋がっている感じ？

と、俺は思い、ワープゾーンに乗った。

すると・・・

『「はじめての解説」から「はじまりの町」に移動しますか？ Y

e s
『No

』という画面が出てきた。

・・・やっぱり、これゲームじゃないのか？

そう思いながら俺は「Yes」を押した。

S i d e
o u t

第一話 「説明」(後書き)

．．．どうしよう、当初の考えと大分ずれてきたw

そして、文が滅茶苦茶。これから書いているうちにマトモな文になるように頑張りたいと思います。

読んでいただいております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2187ba/>

改変世界がネトゲで

2012年1月6日18時55分発行